

SOU ~創発~ HATSU

KEIDAI DAYS

大阪経済大学 経営企画部 広報課

〒533-8533 大阪市東淀川区大隅2-2-8

TEL 06-6328-2431 (代表)

<https://www.osaka-ue.ac.jp/>

vol.51



- 2 ゼミナール教育：ZEMI-1グランプリ
- 4 課外活動：サッカー部 他
- 6 特集 活躍！大経大人：
ハンドボール部OB 酒井翔一朗選手インタビュー
- 8 学生広報隊が行く！「OB・OG訪問」
- 10 社会実践の今：大阪経済大学PBL 他
- 12 社会連携：クールロードお披露目会 他
- 14 OSAKA5GO!WALK
- 16 国際交流：HORIZONS SUMMER PROGRAM2019 他
- 18 大樟会だより
- 20 DAIKEIDAI INFORMATION



日頃取り組んでいるゼミナール活動の成果発表の場として実施するプレゼンテーション大会、ZEMI-1グランプリ。参加はゼミナールを単位としているが、複数のゼミ同士が、あるいは同じゼミ内でも複数のグループがチームとなって、さまざまなプレゼンが行われる。

プレゼンは①論理的思考力②着眼点③情報分析力④プレゼン力⑤質問対応力の項目から審査され、1st STAGE、2nd STAGEを勝ち抜いたチームによるFinal STAGEで、企業経営者ら審査員から、学生たちに鋭い質問が投げかけられる。

上位入賞チームは日経BPマーケティング主催の「西日本インカレ」への出場権を獲得し、活躍の場を学外へと広げる。第10回となった節目の本年は、「Frontierへまだ誰も見ぬその先へ」のテーマのもと熱戦が繰り広げられた。



ZEMI-1実行委員たち。大会運営も学生が担っている。

●70チームが出場

10月19日(土)午前10時から始まった1st STAGE。ランチ休憩を挟み、70チームがAからFの7ブロックに分かれプレゼンテーションを展開。防災、スポーツビジネス、地域おこし、心理学実験など多様なテーマで発表を行った。各ブロック上位3チームが2nd STAGEに進んだ。



結果発表の様子

10月26日(土)、午前10時より2nd STAGEが開幕。勝ち抜いた18チームはプレゼンテーションに一段と磨きをかけ、A～Cの3ブロックに分かれて発表に挑んだ。

Aブロックでは、芳賀麻美ゼミから個人参加の「中山莉奈」が、「フリマアプリの利用と個人特性の関係性分析」のテーマで、どんな人がネットのフリマを積極的に利用するかを分析。Bブロックの二本杉剛ゼミ「チーム五本杉」は「ロコミの信憑性」をテーマに、フェイクのロコミを減らす方法を探った。Cブロックの服部圭介ゼミ「す〜ぱ〜はっとりふぁみりいず」は、「文字で激変!?心のサイズ〜文字の大きさがもたらす心理効果」と題して調査分析した。

●Final STAGE

午後1時10分、D10教室にて、Final STAGEに進む各ブロックの上位2チーム計6組が発表されると、すぐさまファイナリストたちは最終ステージの出番を待った。

最初は服部圭介ゼミ「Hattori brown」。「隣の芝生は何色?〜他者との比較がもたらす心理効果〜」と題し、自己評価の高さが自信につながるという研究をまとめた。藤澤宏樹ゼミ「frappe」は「食品ロスの無い世界へ」をテーマに、消費期限前のコンビニの食品を企業に効率的に販売するシステムを考案。中村健二ゼミの「光KENJI」は、「舞台照明業界をICTで照らす〜Lightix〜」をテーマに、AIを活用して簡単に操作できるピンスポットライトのシステムを提案した。服部圭介ゼミ「チーター・J・ケイスケ」は「コミュニケーションが不正を防ぐ!?〜「ごまかし」の心理に迫る行動実験〜」をテーマに、コミュニケーションの有無と不正の増減の関連性を実証。藤原忠毅ゼミの「リトルグリーンメン」は「Change the action〜メッセージを利用してよりよい世の中へ〜」のテーマで、ルールを守るために効果的なメッセージの出し方を検証。最後に登場した二本杉剛ゼミ「ボン(杉)」は「関西人よ、そこに愛はあるのか?」と題して、地元愛の強さと方言POPの訴求力の相関関係を調査分析した。

Hattori brown



ボン(杉)



プレゼンに続く質疑応答では、「もっと地域性を考えた提案はできないのか?」「実験の結果をもっと深掘りできるのでは?」など、審査員からこれまで以上に厳しい質問が飛んだが、学生たちは堂々と応戦し、成果のアピールに努めた。

frappe



企業経営者ら審査員からは厳しい質問も

●表彰式



午後5時30分から表彰式が行われた。審査員の代表が「『ゼミの大経大』にふさわしい内容だった」と賞賛の言葉を述べた後、結果を発表。1位は服部圭介ゼミ「チーター・J・ケイスケ」、2位は藤原忠毅ゼミ「リトルグリーンメン」、3位は中村健二ゼミの「光KENJI」だった。

1位の服部圭介ゼミ「チーター・J・ケイスケ」のメンバーは、「協力して作り上げた成果が認められてうれしい」と喜びを語った。服部教授も「限られた時間の中で、よく頑張った」とゼミ生をねぎらった。山本俊一郎学長は「友人たちと切磋琢磨した体験は、社会に出てからもプラスになる」とのコメントで締めくくった。

なお、今回のFinal STAGEに残った6チームは、11月24日(日)に開催される第10回西日本インカレ合同研究会予選に出場する。

ZEMI-1グランプリの様子は
本学YouTubeチャンネルより
ご覧いただけます

右記QRコードからチェック◎



右記URL
動画ギャラリー
から!

<https://www.osaka-ue.ac.jp/education/seminar/zemi1/>
※2019年度版は2020年2月頃掲載予定

第10回西日本インカレ合同研究会 予選会に6チームが出場

西日本インカレとは…「日経ビジネス」協力のもとで行われる、西日本エリア(中部・近畿・中国・四国・九州)の大学生を対象にした研究発表会。日頃の講義やゼミで取り組んでいる研究成果を社会経験豊富な審査員たちの前でプレゼンし、直接講評してもらえる。



ZEMI-1グランプリ上位入賞6チームは、11月24日(日)本学で開催された第10回西日本インカレ予選会(株式会社日経BPマーケティング主催)に出場。西日本地区(中部・近畿・中四国・九州)から集まった計23大学129チームがA～Kのブロックに分かれゼミ発表の場に臨んだ。2日後、本戦通知を受け取ったのは、藤原忠毅ゼミ「リトルグリーンメン」、服部圭介ゼミ「チーター・J・ケイスケ」。この2チームは、12月15日(日)の本戦に出場。

サッカー部

第43回総理大臣杯全日本大学サッカー
トーナメント第1回戦

大阪経済
大学 1 0 前半 0 2 後半 2 中京大学

強豪相手に
大健闘!!

東海の名門・中京大学に惜敗

終了間際に失点 あと一歩及ばず

8月29日(木)午後6時、大学日本一をかけた総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント1回戦が、ヤンマースタジアム長居(大阪市)においてキックオフ。対するは5年連続27回出場という名門・中京大学(名古屋市)。相手にとって不足はない強豪との一戦に、最後の最後まで力を振り絞った。



無失点で抑えた前半

第48回関西学生サッカー選手権大会で3位をキープし、4年ぶり4度目の総理大臣杯出場をもち取ったサッカー部。失うものは何もない。前進するのみという思いで、東海の名門チームに全力で向かっていった。序盤から中京大は分厚い攻撃を繰り返して、何度も大経大のゴールを脅かした。大経大も自陣ゴール前のもみ合いをすり抜けチャンスを作り出すものの、シュートまでもっていくことができない。

選手たちは体を張って中京大の猛攻を食い止め、無失点のまま勝負を後半へとつないだ。

ついに1点を奪取

大経大チアリーダー・ジーナスのハーフタイムショーに彩られて始まった後半。ついに試合が動いた。後半17分、中京大のキーパーがペナルティエリアから前へ飛び出した隙に、ボールを奪うとすぐさまパス。前半41分に選手交代で入ったFW植村選手が、ついに敵陣のゴールネットを揺らした。念願の先制点。ベンチ、スタンドから歓喜の声援が響いた。中京大からもぎ取った大きな1点。大経大は前半と打って変わって勢いづき、敵陣のゴール間際までボールを運ぶ機会も増えた。



Voice

●中田 雄一朗 監督
惜しい。あともう一歩。よく頑張ったといえるが、落ちていて最後まで戦ってほしかった。今回の結果を踏まえ、勝ちたいというこだわりの気持ちを強めてほしい。選手たちは、周囲の動きが見えるようになってきています。後期リーグもインカレ出場に向け、一戦一戦大切に戦っていききたいと思います。



●久木元 大海 主将
(経済学部4年)
試合前のミーティングではクロスボールにしっかり対応していこうと話していましたが、最後に失点を許してしまいました。今後のトレーニングでは、ミスしないよう徹底していきたいとします。大経大にはスター選手はいませんが、全員で頑張るチーム。みんなでいい結果が残せるよう、気を引き締めて戦っていきます。



予想外の幕切れ

両軍とも必死で攻めるものの、決め手を欠き、無得点のまま時間が過ぎていった。残り数分、虎の子の1点を守り抜きたい大経大に、中京大が最後の総攻撃。後半44分、ゴール前でのみ合いから中京大がゴール。試合終了まであと1分での痛恨の一撃は、まるで悪夢のような出来事だった。アディショナルタイムは5分。試合を制したのは中京大だった。つばぜり合いから、ゴールに決定打を押し込まれた。大経大は最後まで執念で戦ったが、中京大の守りは堅く、無念の終了ホイッスルが鳴り響いた。後半最後の1分、一瞬のミスから痛恨の失点、さらに追加点を奪われ、勝負の怖さや厳しさを思い知った部員たち。惜しくも今回はここで敗れた。しかしこの敗戦は、真に強いチームをめざす道のりへの通過点。これからのサッカー部に大きな期待を寄せたい。

体育会サッカー部 川崎一輝選手

カマタマーレ讃岐(J3)に新加入内定



体育会サッカー部所属の川崎一輝選手(経済学部4年)が、カマタマーレ讃岐(J3)に新加入することが内定した。10月24日(木)にカマタマーレ讃岐の西村俊寛ディレクター、山本俊一郎学長、宋仁守サッカー部顧問、中田雄一朗サッカー部監督が見守る中、仮契約を締結。川崎選

手は「自分の夢だったプロサッカー選手になることができ、とても嬉しいです。チームの勝利のため、得点はもちろん、誰にも負けない気持ちでプレーします。全てのことにに対して感謝の気持ちと謙虚さを忘れずに全力で頑張ります」とコメント。今後の活躍に期待したい。

経スポTOPICS

■バスケットボール部

関西学生バスケットボールリーグ戦 2部リーグ制覇! 1部復帰

2019年11月3日(日)、本学バスケットボール部が関西学生バスケットボールリーグ(2部)で優勝し、1部リーグへの復帰を決めた。

2部リーグ戦17試合を終え15勝2敗の本学は、リーグ最終戦で同リーグ2位の神戸医療福祉大学と試合を行った。第1Qから接戦が続く第2Q終了時にはリードを許すも、最後は6点差をつけて勝利。最終戦を勝利で締めくくり、3年ぶりの1部復帰を決めたチームは歓喜に包まれた。



全国大会出場

■アイススケート部

第92回日本学生氷上競技選手権大会(フィギュア競技)出場 宮垣 陽菜(人間科学部1年生)
[予選] 第13回西日本学生フィギュアスケート選手権大会〔女子6級クラス〕第5位
[結果] 試合:1月4日(土)～

■弓道部

○第43回全日本学生弓道女子王座決定戦出場(2年ぶり2回目)
[予選] 関西学生弓道リーグ戦〔1部リーグ〕優勝
[結果] 試合:11月26日(火)
○第43回女子東西学生弓道選抜対抗試合(西軍代表)出場 杉岡 亜純(経営学部3年生)
[予選] 関西学生弓道リーグ戦〔1部リーグ〕個人的中率十傑 第1位
[結果] 初戦敗退

■剣道部

第67回全日本学生剣道優勝大会出場(3年ぶり)
[予選] 第67回関西学生剣道優勝大会 ベスト12
[結果] 1回戦敗退

■サッカー部

第43回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント出場(4年ぶり4回目)

[予選] 第48回関西学生サッカー選手権大会 第3位
[結果] 1回戦敗退

■準硬式野球部

文部科学大臣杯第71回全日本大学準硬式野球選手権大会出場(3年連続)
[予選] 第71回関西地区大学準硬式野球選手権大会 優勝(13年ぶり3回目)
[結果] ベスト8

■ハンドボール部

高松宮記念杯第62回全日本学生ハンドボール選手権大会出場(34年連続54回目)
[予選] 関西学生ハンドボール春季リーグ戦〔1部リーグ〕第2位
[結果] ベスト16

■陸上競技部

2019関西学生陸上競技種目別選手権大会 男子200m 出場 藤井南希(人間科学部2年生)
[結果] 記録21.19秒(5位)
※2020年度の日本学生陸上競技対校選手権大会(全日本インカレ陸上競技)および全日本学生個人選手権出場権獲得

スポーツ・文化センター(KSCC)では、クラブ活動支援のひとつとして『観る』に力を入れている。学生や教職員、OB・OGなどが一堂に会して応援を行う「クラブSpecial応援」、本学が会場校となる場合の「ホームゲーム」などを『オール大経大』で応援。大学生活を楽しむひとつのイベントとして、会場に足を運び、仲間への熱い声援を送ろうと学生たちに呼びかけている。

你知道吗?

Special応援DAY



Special応援DAYの日時は
大学ホームページでチェック!
<https://www.osaka-ue.ac.jp/life/kssc/root/>



卒業生や保護者の方も
参加できます!

卒業生インタビュー ～2020年東京オリンピックを目指して～

今を100%ポジティブに生きよう！

ハンドボール部から実業団に進み、現在日本代表として活躍を続ける酒井翔一郎選手に、全日本選手権大会34年連続・54回出場を誇るハンドボール部主将・鶴田将之さん(人間科学部4年)がインタビュー。「自分からハンドボールを取ったら何も残らない」という大先輩は何を語るのだろうか。



さかい しょういちろう 2015年人間科学部卒業、同年より佐賀県神埼市に拠点を置くトヨタ紡織九州ハンドボール部に加入。2016年ヒロシマ国際ハンドボール大会にて日本代表に初選出される。2018年アジア選手権、2019年JAPAN CUP日本代表。ポジションはPV(ピボット)。

ハンドボールをしたい、それしかなかった学生時代

鶴田 ハンドボールを始めたきっかけは何ですか？

酒井 小学校時代からスポーツは好きで、特に水泳やバスケットボールに夢中でした。ところが中学には水泳部もバスケ部もなく、唯一ハンドボール部ならあるという状況の下で、仕方なく始めたのです。でも顧問の先生に恵まれ、すぐにこの種目が好きになりました。シュートが決まると気持ちがいいし、褒められると嬉しい。そういう成功体験が積み重なって、気づくとハンドボールから抜けられなくなったという感じですね。

鶴田 ずばり、酒井さんにとってハンドボールって何ですか？

酒井 私からハンドボールを奪ったら何も残りませんよ(笑)。他に何もできない人間じゃないかと思うこともあるくらいです。人との繋がりも、結局ハンドボールを通じての絆ですし、判断力、交渉力、コミュニケーション力なども、ハンドボールを経験することで身についたと感じています。

鶴田 私にとっても、ハンドボールはかけがえのない存在です。このスポーツを通じて出会った人たちのおかげで、自分も成長してこられたと思います。学生時代はどんな風にすごされましたか？

酒井 ハンドボールに没頭していました。服が買いたいとか、遊びに行きたいなどの欲もなく、睡眠欲、食欲の外にはハンドボール欲しかない毎日でした。仲間との食事や飲み会でも、戦術や体調管理などの話ばかりしていました。

鶴田 私も、仲間とハンドボールの話をしている時が本当に楽しいです。1年の頃から、同期の仲間とどうすれば強くなれるか話し合っていました。

酒井 1年の頃から前向きに話し合ってきたなんて、本当に立派ですね。建設的な意見の交換は人を成長させ、結果を呼び込みます。鶴田さんのような選手がいるから、今、ハンドボール部は成績がよいのですね。

鶴田 ありがとうございます。大学時代の授業の思い出などはありますか？

酒井 コミュニケーションについての心理学の講義を覚えていますね。初対面の人たちがどう仲良くなるかを考える「アイスブレイク」などは、今でもチーム作りの点で役立っています。

なんでも言い合える、いい環境が人を伸ばす

鶴田 日本代表チームの日常や、試合の様子を教えてください。

酒井 代表に選ばれると毎日、毎日が真剣勝負です。対戦相手との勝負、熾烈なメンバー争い、自分との闘い、どの部分にも気が抜けません。忘れられないのは、メンバーから外された時のことです。ショックでしたが、自分にできることは何かを振り返り、必死で練習しました。自主トレにも今までになく力を入れた。それだけに、再び選ばれた時は「コーチ陣はちゃんと自分のことを見てくれていた」という思いで胸一杯になりました。試合での最高の思い出は、代表として初ゴールを決めた時、ベンチが総立ちになって喜んでくれたこと。涙が出るほど嬉しかったです。みんなに支えられて試合に出ているのだと実感しました。

鶴田さんは関西選抜に選ばれた時には、どんな感じがしましたか？技術もあって主張の強い人たちとチームを組んだのだから、特別な感想があるのでは。

鶴田 関西選抜は普段のチームとは違って、皆さんエース級なのですごいなと思いましたね。もっと頑張ろうと意を新たにしました。

酒井 どんな人と一緒にいても、遠慮せず自分を主張していけばいいと思いますよ。コートの上では120%自分を出し、反省は後からするというのが正解。自分を出している人が結果を残しています。なかなかうまく自分を出せない選手もいますが、そういう人には、話しやすい環境をつくってあげないと。

鶴田 その点では、主将を任されてから「後輩に遠慮させてはいけない。みんなに積極的に話しかけて、意見を出しやすい環境を作ろう」と考えるようになりました。

酒井 うちのチーム レッドトルネードは、日本リーグの中で一番よい人間関係が築かれているチームだと思います。年上の人と何でも言い合えるような日頃のフラットな関係が、プレーにもいい形で影響していますよ。



鶴田 海外チームと対戦した時の印象について教えてください。

酒井 海外の選手は、徹底的に計算して動いています。映像で見るとシンプルなことをしているように見えますが、メンバー全員が「今自分が何をすべきか」を理解しているから、全く無駄がない。スピード、テクニック、判断力、全て体に染み込んでいるのはすごいなと思います。

鶴田 海外遠征で楽しかったことは？

酒井 欧州遠征の際、アイスランドでトレッキングなどのアクティビティを体験したのが楽しい思い出です。仲間との絆も深まりましたね。今の日本チームのヘッドコーチはアイスランド出身なので、アイスランドとは縁があります。

全力で取り組むことで、自信が生まれる

鶴田 今後の抱負を教えてください。

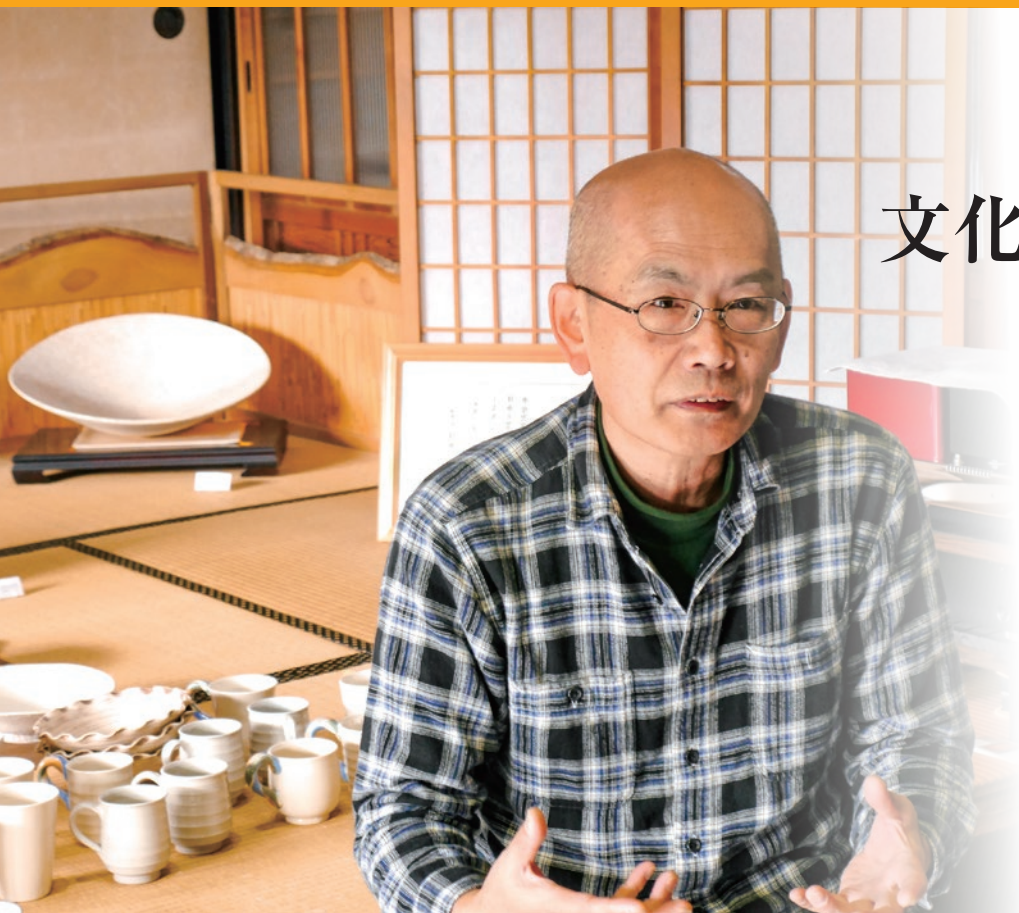
酒井 まずオリンピックに出場する。そしてベスト8をめざす。この目の前の目標を、絶対に叶えたい。

私はポストという、攻撃の起点となるポジションなので、相手チームのディフェンスに楔を打ち込み、チャンスが作れるよう頑張りたいですね。

とにかくチームが勝つことが大切です。たとえ自分が凹んでいる時でも、どうすればチームが上向きになるか考える。自分に何ができるかを、チームをベースに考える。このことは、一流選手はみんな実行していると思います。

鶴田 とても大切な考え方ですね。最後に、勉強やスポーツで頑張っている母校の後輩たちにメッセージをお願いします。

酒井 今、100%本気で生きてほしい。長期的な目標を立てることも大切だけれど、今を全力で生きる人は、ポジティブになれる。「ここまでやった！」と思えるから、自信ができて心が強くなれる。このことはスポーツでも仕事でも、学業でも同じではないでしょうか。



文化を紡ぐ継承者

陶芸家 清水 一二さん
Ichiji Shimizu

11月20日(水)、学生広報隊は大阪経済大学のOBであり、陶芸家の清水一二さんにお話を伺いに兵庫県丹波篠山市の粕屋窯に向かった。

PROFILE

しみず いちじ 1961年丹波立杭に生まれる。1980年三田学園高等学校卒業、1984年大阪経済大学経営学部卒業。日本伝統工芸展をはじめ、多くの公募展で入選。現在も個展などを開き、精力的に活動中。兵庫県工芸美術作家協会理事。

清水一二さんが生まれた丹波篠山市は古くから陶芸の産地であり、幼少の頃から陶芸とふれあいながら育ったという。大学卒業後、地域文化を継承するために陶芸の道に進んだ。陶芸家になるには、窯元に弟子入りして技術を見て盗み自分のものにすることから始まる。弟子時代、清水さんの周り是一般企業へ就職する同級生が多く、当時はパブルの真っ只中であり、企業に就職し立派になっていく周りの同級生と比較し、陶芸の道に進むことに葛藤があった。

しかしそんな清水さんに転機が訪れる。修行先で兄弟子からもらった一冊の本との出会い。丹波立杭の陶芸は民窯と呼ばれ、日常で使う器やすり鉢など実用的な陶器を主に作る作風だった。もらった本には、官窯と呼ばれる政府や幕府などに献上する鑑賞用の焼き物を作る作家の作品が載っていた。清水さんは衝撃を受けた。自分たちのやり方しか知らない清水さんにとって未知の領域の作品ばかり。これをきっかけに焼き物の世界の広さを知り、ますます陶芸にのめりこんだ。「自分もこんな焼き物を作りたいと思い、まずはその作品をまねることから始め、試行錯誤しながら自分の作品に取り入れようと思いました」と語る。

陶芸にのめりこむ中で、成功ばかりで

はなかった。土を自分の理想の形に整えるのに10年かったという。理論を頭で理解するのはもちろんだが、手が覚えて使えるようになるには長い時間がかかる。更に目標とする賞の受賞には15年もかかった。しかし「賞に落ちることは大事。賞に落ちると、なぜ落ちたのだろう。どうすれば通るのだろう。というように考えるようになります」と清水さんは語る。常に改善を行っていったその過程が「職人」と「作家」の違いを自分に生み出した。

また、作家を続ける上で、自分の軸を保ち続ける秘訣として、自分にしかない技術を身につけることを大事にしてきたという。「手についた技術がないと自信がなくなる。この部分だけは誰にも負けないという自信があれば、少々の壁は乗り越えていけます」と語る。

そんな清水さんから在学生にメッセージを頂いた。「どんなことでも経験することが大事。何をやっても無駄なことはないと今になって思います。結果的に人生の引き出しを増やすことになります」

最後に陶芸の魅力について「いい器を使うと、普通のものとは違う“潤い”を感じられる。次の日の活力になると思います」と語った。

清水さんの取材を通じて、たとえ最初

は嫌だったとしても、まずやってみることで自分なりの向き合い方や苦勞の乗り越え方が生まれていく。それが自分の自信につながっていく。そして面白いと思えたものにのめりこむことが原動力になると感じた。とことんのめり込む経験は財産になり自らを助けることになる。若いからこそどんどん挑戦していくことが大事なのだと知った。

文：入谷 翔(経営学部1年)
写真：森本 燎(経営学部4年)



陶芸から広がるつながり

陶芸家 古野 幸治さん
Yukiharu Furuno

令和最初の国賓としてトランプ大統領が来日した際、天皇、皇后両陛下が贈ったコバルトブルーの飾り鉢『瑠蒼釉鉢』。その作者が本学32回卒業生である古野幸治さんと知り、私たち学生広報隊は11月9日(土)、堺市にある土工房轆轤にて取材を試みた。

PROFILE

ふるの ゆきはる 1943年大阪府の阪南市に生まれる。1966年大阪経済大学を卒業。同年から陶芸活動を開始し、日本伝統工芸展をはじめ、多くの賞を受賞する。現在も国内・海外で個展などを開き、精力的に活動中。大阪工芸協会名誉会員、日本工芸会正会員。

現在、陶芸家として活躍している古野さんは、日本伝統工芸展入選30回、日本伝統工芸近畿展入選45回をはじめ、多くの賞を獲得されている実力者である。日本のみならず海外にも芸術作品を提供している。

商業高校から本学へ進学、在学中は貿易商社に就職することを考えていたという。しかし、卒業後に陶芸家の道に進んだ。どうして陶芸の道に決めたのか尋ねると、「当時の恋人から卒業間近になった時、勤め人にならないで、誰もしていないことをしようと言われ、いくつか企業の面接を受けていましたが、何か始めようと考えようになりました。当時、教材陶器で商売する友人を手伝っていたのですが、それがきっかけで陶芸の道を見つけたんです」と話す。さらに、大阪に拠点を置いた理由として「学校教材陶器の商売は、大阪から車で20分の和歌山県はまだ誰もやっていないと友人が話していました。そのため、焼き物を習いたての時期から、和歌山県全域の美術の先生に講義して回りながら学校教材陶器を広めました。今なら考えられない無謀なことです。ほんま若いってすごい!」と話す。当時から自主的に動いてつながりを深めていたようだ。

「この世界は人との出会いが一番大切。



個展を開くと、人との新しい出会いがあり、世界が広がります」と強調する古野さんに、一番印象に残っている個展について尋ねると、「大阪の三越百貨店で行った個展で、化学の先生と出会ったことです。真っ赤な酸化鉄を使うことを勧められ、色の変化を見つけ出す実験を行ったところ、綺麗な黄色を生み出すことができました。そうした初めての人との出会いが、陶芸の活動のプラスになって世界が広がっていききました」と語った。

冒頭でも触れたが、令和最初の国賓となったトランプ大統領へ、天皇后両陛下



下が贈られた古野さんの作品『瑠蒼釉鉢』は、日本のみならず海外の人々にも注目されている。「作品を通してSNSで国内外の人ともつながっているため、『とても感動した』と連絡をもらったこともありました。海外の人々とつながることで国によって陶芸の認知のされ方がまったく違うということを知りましたね」と語る。作品へのこだわりについては「いいものを作り、納得できないものは世に出さないという考え方を持っています。だからこそ、昔も今も誰も作っていない個性のあるものを生み出していきたい。そして、人が欲しがるものを作ることに焦点を置いています。自己満足ではダメ。今は『ギャラクシー』というテーマで15年前に亡くなった妻のことを思い、大海原の深海の色・空の上の大宇宙をイメージして作品の制作を行っています」と語った。最後に学生に対してのメッセージとして、「学生の時にしかできないことをやってほしい。若さは力であり武器。いろいろ悩んで思案に暮れるのではなく、まずやってみることが重要だと思います」と話してくれた。

文：三宅佳織(人間科学部2年)
写真：森本 燎(経営学部4年)



大阪経済大学PBL 企業とコラボ

リアルな題材を通して 生み出す課題解決力

大阪経済大学PBL(Project Based Learning／課題解決型学習)が、夏休み期間中の8～9月にかけて行われた。今回の協力企業は、スリーエム ジャパン株式会社で、35名(1年生18名、2年生17名)の学生が参加した。



初回のプログラムは、8月20日(火)スリーエム ジャパン大阪支店でオリエンテーション、ワークが行われた。まず、受講生たちはチームビルディングの際、自らチーム分けの方法を提案。7名×5チームに分かれた。今回のテーマ「ポスト・イット® エクストリームノート」を

めっちゃバカ売れさせる方法とは？」が発表された。そして山本学長が「市場にモノがあふれ、売るのが難しい時代。これまでにない価値観を生み出し、新しい市場を作り出すことが大事」と受講生を激励。続くオリエンテーションで、スリーエム ジャパンの会社概要と日本初上陸の「ポスト・イット® エクストリームノート」の商品特性について説明があり、チーム全員の意見を引き出し、まとめていく作業がスタートした。

第4回の中間発表は、9月10日(火)、本学D館12教室で行われた。初日に構成された5チームは、それぞれに「スムージー」「JUST DO IT!」「3年A組～天気の子たち～」



たち～」「オールフォーワン」「ひらめき」とチーム名を決め、第2回(8月27日)、第3回(9月3日)のワークで取り組んだ仮説の設定や解決策の洗い出しの成果を発表。スリーエム ジャパンのご担当者様から、厳しい指摘と共に、「若いアイデアを期待している」と激励された。

最終日の9月18日(水)は、スリーエム ジャパン大阪支店において成果発表が行われた。「スムージー」は、建設現場や調理現場のヒヤリハットに着目し、解決策としての活用を、「JUST DO IT!」は、販売ターゲットを農業に定め、特性を活かした使用法と売り込み方法を、「オールフォーワン」は、ターゲットを災害現場の消防・自衛隊・自治体や引っ越し業者と定め、使用や販売のためのPR方法を、「3年A組～天気の子たち～」は、ターゲットを高齢者向け介護施設に設定し、具体的使用例を寸劇などでアピール。「ひらめき」は、現状と課題を調査し、3年間で3億円を売り上げるための行動目標と広告イベントなどを提案した。

各チームのプレゼン内容についての講評では、「ターゲットを深掘りできていた」「視点が新鮮だった」「実現性の高いイベント提案だった」「学生らしさが感じられた」などの高い評価が得られ、最優秀チームには「スムージー」が選ばれた。同チームのリーダーは「プレゼンを論理的に組み立てるのが難しかったが、面白いアイデアを出せて楽しかった」などとPBLを振り返りながら、「人の意見をまとめられるようになったと思う」と自身の成長を語った。



JUST DO IT!



オールフォーワン



3年A組～天気の子たち～



ひらめき

経営学部江島由裕ゼミの2人が

「羽田土曜会～ニッポンを元気にする地方の星～」に出演

●ゼミでのPBL活動が出演のきっかけに

江島由裕ゼミで毎年実施しているPBL(Problem Based Learning)にご協力いただいている株式会社フィールド(齋藤貴之代表取締役社長)の取り組みがBSテレ東「羽田土曜会～ニッポンを元気にする地方の星～」で特集されることになった。同社が開業した hostel The Stay Osaka 心斎橋(大阪市中央区)の活性化や宿泊客に喜ばれる情報提供などの取り組みには、江島ゼミの存在なくして語ることはできないということで、出演依頼があり、経営学部3年 橘高英資さんと吉川佳佑さんがテレビ番組の撮影に挑んだ。

当日は「まっちゃまち筋商店街」で hostel の宿泊客であるフランス人男性2名をアテンドの様子を撮影。カメラが回っていても自然体の2人は、ディレクターから今回のPBLでの提案のきっかけや自分の企画を実際にやってみての感想などの質問にも的確に答えていき、テレビカメラの前でも落ち着いて話した。放送予定は2020年2月。



テレビ局：BSテレ東
番組名：羽田土曜会 ニッポンを元気にする地方の星
https://www.bs-tvtoyo.co.jp/haneda_doyoukai/
放映日：2020年2月【予定】

本学初となる「能力開発インターンシップ」の発表会が、8月8日(木)午前10時から、B館1階セミナールームで行われた。初回の実習先となった協力企業は、持続可能な農業をめざす「ドクター・オブ・ジ・アース株式会社」。2名の学生が参加し、4月～7月の4ヶ月間・週1回の就業を体験した。

まず西川喬之さん(経済学部3年)が発表。「コミュニケーション能力や自分で考え行動する力を養えたかった」と参加動機を語り、実習内容や「積極的なコミュニケーションで信頼を得られた」などの成果と反省点に触れ、「学んだことを次に活かしたい」と締めくくった。



発表する西川さん

山本翔斗さん(情報社会学部3年)は、「マナーを身につけ、自分の能力を発見し磨きたかった」と参加動機を述べ、実習内容と振り返りの反省点に続き、「自分の能力を高めていきたい。自身の意見も大事だが、相手の意見を受け止めることも大事だとわかった」とインターンシッ



能力開発 インターンシップ 発表会

社会で活躍するための 意識と能力を高める

プの成果を語った。

2人を受け入れたドクター・オブ・ジ・アース株式会社代表取締役の河村賢造氏は「地味な作業だったが頑張ってくれた。真摯に仕事に取り組み、現場の信頼を勝ち取った」と2人を賞賛。現場で指導にあたった同社の杉本圭隆氏にも、2人が取り組んだ「改善業務」が高く評価された。

また、同インターンシップをコーディネートした Dirise(ディライズ)と discovery(ディスカバリー)の代表からは、「今回の気づきを今後活かしてほしい」「この経験を勉学や学生生活に活かしてほしい」とアドバイスがあった。

進路支援部の佐々木繁さんは「現場に受け入れてもらえたようで安心した。懸命な姿勢が評価されたのだと思う」と述べ、最後に岸田祐和部長が「貴重な経験を積ませていただいた。失敗が成功へと導く人が評価される。失敗ができる学生時代に大いに挑戦してほしい」と、2人の今後の活躍に期待を示した。



発表する山本さん

クールロードお披露目会

地域と共につくる 災害に強いまち

大阪北部地震から1年を迎えた6月18日(火)、本学が整備した「クールロード」のお披露目会が行われた。クールロードは大隅キャンパス東西校地の北側歩道計140mを、クールスポットおよび防災用公開空地として桜並木を含めて整備したもの。平常時は学生や地域市民の憩いの場であり、災害時は炊き出しも可能な防災拠点となる。



本学は2017年、大阪市東淀川区役所と「災害に強いまちづくりに関する連携協定」を締結。東西校地北側歩道約1,000mを、防災用公開空地として大阪市から払い下げを受け、工事を進めてきた。さらにこの取り組みを、夏場の屋外空間における暑熱環境を改善する「平成30年度大阪府クールスポットモデル拠点推進事業」として提案。「大阪経済大学クールスポット整備事業」として採択された。

お披露目会では、まず大阪北部地震の犠牲者に黙祷を捧げ、続いて山本俊一郎学長が、クールロードの整備に尽力した多くの関係者に謝辞を述べ、「地域の人々の憩いの場になってほしい。地震などに対する危機感は時間と共に薄れがちだが、

この場所を利用することで、防災に対する意識を高めて維持してほしい。本学は今後も、地域の皆さんと協働できる大学をめざし活動していきたい」と挨拶した。また、来賓の北岡均東淀川区長が祝辞を述べ、「防災に対する考え方として、自助・共助・公助の三助があるが、自助が最も大切。地震は予測できないので油断せず備えてほしい」と述べ、日常的な防災対策の必要性を訴えた。

その後、山本学長と来賓代表がテープカット。同時に、水の気化熱を利用して周囲の空気を冷やす「ミスト発生器」から、涼しげなミストがクールロードに噴霧された。また、平常時は学生や市民がくつろぎ、災害時に炊き出しができる「か

まどベンチ」9基も紹介され、学生が、かまどベンチを組み立て火おこしする実演も行われた。そして、学生が商品開発に関わったムレスナティー「College TEA」がお披露目会の参列者に振るまわれた。

クールロードでは他にも、12本のソメイヨシノが木陰をつくり、3種類のつる性植物が南からの日射を遮ってくれる。



タイムが上がった 気持ちよく走れた 能勢の子どもたちの 元気をサポート!

2019年4月、能勢町教育委員会から協力依頼を受けて、本学スポーツ・文化センターによる「能勢っ子! かけっこ! 日本一!」がスタートした。人間科学部 若吉浩二教授が提唱する「オノマトペ体操」(ぎゅっぎゅっ、しゅっしゅっと声を出しながら体を動かす体操)の能勢バージョンを共同制作する他、学生たちが運動指導を行うなど、町ぐるみで子どもたちの「疾走力向上」に取り組んでいる。

早朝からやる気いっぱいの子どもたち

参加者は、地元の保育所・幼稚園に通う幼児から小中学生、その保護者など計170名。若吉教授と九鬼靖太人間科学部講師(陸上競技部コーチ)、竹澤健介陸上競技部ヘッドコーチが指導にあたり、若吉ゼミの学生たちと陸上競技部学生がアシスタントを務めた。オリンピックによる直接指導が受けられるとあって、8時の受付開始時にはグラウンドに大勢の人が集合。開会式が終わると、保育所・幼稚園児と小学1、2年生は体育館で、高学年と中学生はグラウンドでかけっこ教室に参加した。

「歩く」「走る」の基本をしっかり指導

体育館では若吉教授のリードで、準備運動の後、30m走を行い、タイムを測定した。続いて教授が手の握り方やつま先の向きなどを詳しく指導。よい歩き方、走り方の練習を行い、最後に再び30m走に挑戦。タイムの伸びを確認した。

グラウンドでは小学校高学年生と中学生が50m走を行った後、グループに分かれて指導を受けた。九鬼講師のグループは、ミニハードルの間隔を変えながら走り抜ける練習を、竹澤コーチのグループは効率よく走るための連続ジャンプを体験。その後に再び50mを走り、疾走フォームを撮影した。

ミニ駅伝大会と笑顔の記念写真

最後は「第1回能勢箱根駅伝」と題してミニ駅伝大会がスタート。一周800mほどのコースを、小中学生たちがリレー形式で走り継いだ。本学の学生たち、九鬼講師、竹澤コーチも登場。参加した中学生は「くたびれたけど参加してよかった。いいアドバイスが聞けた」「翌月のマラソン大会にプラスになる練習ができた」と感想を語った。フィナーレは参加者全員での記念撮影。気持ちのいい笑顔でイベントを締めくくった。

能勢っ子!
かけっこ!
ランRUNラン!



若吉浩二
(人間科学部教授)
元五輪水球日本代表
タイムが伸びた子どもが多かったようです。これを機に、ご家庭でもスポーツを通じたコミュニケーションが活発になると思います。



九鬼靖太
(人間科学部講師)
陸上競技部コーチ
学生たちがいい見本を示そうと頑張ってくれました。彼らにとって、このイベントはフィールドワークでもあります。多くのデータが得られたことで研究が進むと思います。



竹澤健介
(陸上競技部ヘッドコーチ)
元五輪陸上日本代表
その場でジャンプが向上した子もいましたね。ランニングの上達に大切なのはいい姿勢を維持すること。日常生活の中でも、座る、立つなどの動作の中で姿勢を意識してほしいと思います。

第19回高校生フォーラム「17歳からのメッセージ」において、10月から12月にかけてグランプリと金賞受賞者の高校を訪問し、表彰状を授与した。

今年の募集内容は①「今までの自分、これからの自分」②「人工知能(AI)とどう向き合っていくか」③「今、これだけは言いたい! (自由課題)」で、応募数は全国476校から34,609作品、過去最高となった。9月3日(火)に選考会が行われ、グランプリ3作品、金賞9作品(学生審査員賞1作品含む)、銀賞54作品、奨励賞84作品、学校特別賞30校が選出された。

各校での表彰式では、山本俊一郎学長や近藤直美審査員長、團審査員が広報課職員と共に各高校を訪問し、全校集会や校長室などで受賞者に表彰状を直接授与した。

長崎県立上五島高等学校では全校集会で表彰式の場を設けていただき、「手紙」と題して記憶障害を持った祖父との手紙のやりとりを綴った作品で受賞者の家族も駆けつけ、表彰式を見守った。また、沖縄県立那覇高等学校では校長室での表彰式に受賞者の友人たちも参加して喜びを分かち合った。それぞれの高等学校での表彰の様子はテレビ局や新聞社にも取り上げられ、受賞者の喜びの

素直に書くことで心が満ちる 17歳からのメッセージ表彰キャラバン

声が伝えられた。

受賞者の反応は様々で、「応募すると知らずに今の自分の気持ちを素直に書いた。自分にとっては特別でないことでも17歳の率直な思いとして受け取られ、それが受賞につながったのかなと思う」「昨年に友人が受賞したので、今年は自分が受賞したいと強い思いをもって書いた」などの感想が寄せられた。高等学校の先生方からは「国語表現」の教材として評価する声をいただき、高校生たちが自分の思いを表現する場としての本フォーラムの存在感を改めて認識する表彰キャラバンとなった。



山梨学院中学校・高等学校にて左から山本学長、飯野愛裕美さん、山内校長



鹿児島県立伊集院高等学校にて左から頼美慶さん、近藤審査員長



OSAKA 5GO!WALK

～災害に強いまちづくりは健脚から～

開催

災害に強いまちづくりと健康促進をめざし、東淀川区役所との共催、多数の企業の協賛で、12月7日(土)にウォークイベント「OSAKA5GO!WALK」が実施された。この催しは、災害時に帰宅困難となった場合、歩いて帰れる20kmを目安として5時間歩ける健脚づくりと、まちを防災の視点から見直し、まちの魅力を再発見することを目的に、淀川河川敷などを5km、10km、20kmコースに分かれて歩くイベントである。3年目の今年は、学生や地域住民など約900人が参加した。学内でも協賛企業などが防災・減災に関連するブースを開設。学生や地元有志によるステージや自衛隊の炊き出しも行われた。

D館ホールではゲストと学生による防災セミナーを開催。大勢の参加者で盛り上がった。



ウォーク参加者が本学をスタートしたあと、キャンパス内では、華やかなステージイベントや協賛企業・自治体などによるブース出展などが行われた。

D館前のステージでは、CBS文化放送局の学生の司会で、本学学生や子どもたちによるさまざまなイベントがスタート。トップバッターは、〈チームエクストリー

ム〉で、PBL(問題解決型学習)で取り組んだ内容と成果を発表し、自分たちのチャレンジと成長をアピール。続いてチアリーダー部が、試合時の応援ダンスやハーフタイムショーなどを披露。あふれる笑顔とアクロバティックな演技に、大きな拍手が贈られた。

ほかにも、区民によるキッズダンス、フラダンスやバトン演技、空手道場のメンバーによる演武、ママさんたちによるゴスペルなど、盛りだくさんなプログラムを、ゴールしたウォーク参加者などが、ベンチでくつろぎながら楽しんでいた。

また今年も、自衛隊による炊きだしが行われ、自衛隊カレーがウォーク参加者に振る舞われた。地元の60代男性は「あっさりしていて美味しい」。5kmコー

スを歩いたという男性2人は「運動後のカレーは格別」と、満足そうな表情でカレーを頬張っていた。

また、今年4月本学東西校地北側歩道に設置されたかまどベンチを使った初の試みとなる「大樟の湯」では、ダンボールとブルーシートで組み立てた湯舟に、かまどベンチで沸かした湯を入れて足湯を設置。ウォーク参加者が疲れを癒していた。

防災や健康をテーマにした14ブースも、ウォーク参加者や地元住民で大いに賑わった。また東淀川消防署の地震体験車(起震車)には、家族連れなどが乗り込み、予想を超える激しい揺れに巨大地震の怖さを実感。自宅における地震対策の必要性を痛感したようだった。

出展ブース



歩いて知る地域の魅力と防災施設

●産学官連携で帰宅困難者想定ウォークも実施

大地震でなくても交通機関の麻痺等で帰宅困難に陥った場合を想定して、若吉浩二人間科学部教授とゼミ生、東淀川区役所職員、企業の方、約20名が梅田から本学までの約10kmの道のりを歩いた。

●5kmコースは学生実行委員が企画・運営

5kmコース通過地点の豊里中央公園では、災害時にトイレとして使えるマンホールトイレと可搬式ポンプに関するパネル解説を学生が紹介。消防車が入れない場で活躍するポンプの説明に、一同は足を止めて聞き入った。街中から淀川河川敷へと進んだ頃には、「体がポカポカしてきた」という声が随所で上がった。江口中央倉庫周辺では、土のうやビニールシートなどが収納されている水防倉庫につい



ウォークイベント

てのパネル解説も行われた。

10km、20kmコース参加者が立ち寄る瑞光寺公園では、防災時に煮炊きができるかまどベンチを紹介。近隣自治会の方が「直火で心まで温まってほしい」と、温かいお茶を振る舞った。

●みんなの絆が深まった1日

参加者は各コースを完歩して本学キャンパスに戻り、参加記念の防災グッズを手にホッと一息。赤ちゃんを抱っこして参加した方は、「来年は、この子も少し歩

いて参加できるかな」。近所からの参加者は「日頃こんなに歩くことはないから疲れたけれど、楽しかった」と感想を述べた。



防災セミナー

防災・減災を本気で考えよう

●災害は「自分ごと」をアピール

セミナー1では、ZEMI-1グランプリで防災をテーマに発表した上宮智之ゼミ(経済学部)、藤澤宏樹ゼミ(経営学部)の学生たちがプレゼンテーションを行った。上宮ゼミは「東淀川区の水害の変遷とこれからの防災対策」と題し、大学周辺地域での水害を教訓に、よりよい防災対策の

あり方について発表。藤澤ゼミは、「経大防災革命～本気で防災訓練するために～」をテーマに、地震などの災害を「自分ごと」として真剣に防災訓練を行うことの重要性を訴えた。

その後、テレビでおなじみの気象キャスター 蓬萊大介氏による講演「天気予報の活用と自然災害の備え」が行われた。続くセミナー2では、大阪府危機管理室

防災企画課地域支援グループ主催の中家貴士氏による講演「大阪府内で想定される地震被害と備えについて」が行われた。

●手作り防災マップづくり

セミナー3では、「OSAKA5GO!WALK」5kmコースの参加者を交えて、学生の企画によるイベント「自分の防災マップをつくろう!」が実施された。参加者は学生の説明を聞きながら、ひび割れた塀、水害時避難ビルの標識、マンホールトイレなどの防災設備などをチェックし、手作りの防災マップを完成させた。

そして全国最年少の防災士である出水真輝さん(小学6年)が、「全国最年少防災士と考える防災」と題するミニ講座で最後を締めくくった。

学生実行委員長の鉢上光樹さん(経済学部4年)は「コースの下見を重ね、入念に準備した。大変だったが、達成感を味わえた」と振り返った。関わった人それぞれが、防災を多様な視点から学ぶことができたセミナーだった。

本学での学びや日本文化を海外提携校などの学生に体験してもらおうという、13日間のホライゾン・サマープログラム。3回目となる今年は7月2日(火)開講式からのスタートで、中国、ニュージーランド、米国、タイ、台湾、ドイツの9大学から19名の学生が参加した。

●異文化を「深掘り」する機会を提供

E館54教室での開講式は山本俊一郎学長が駆けつけ、「文化の違いを乗り越え交流することは大切。それを実感し、プログラムを楽しんでください」とメッセージを贈った。



続いての昼食は、D館80周年記念ホールでのウェルカムランチ。崎田洋一常務理事が乾杯の音頭をとり、パーティが始



まった。在学生の交流スタッフと留学生たちは国際部・北川健部長の「これを機に提携校間、学生間の交流が進んでほしい」との挨拶どおり、すぐに仲良くなって歓談した。

今回参加した留学生たちは「大阪、京都の歴史、建築に興味がある。エキサイティングな内容にワクワクしています」(米国・ノースイースタン州立大学)、「大阪が好き。日本の文化や経済に関心があります」(ドイツ・ベルリン技術経済大学)

など日本に対し、さまざまな面から関心をもつ学生たち。プログラムでは本学教員が英語で日本文化を多面的に考察する専門講義に加え、日本語の授業も10回にわたり開講し、より深く日本を知ってもらうプログラムを提供した。半日の学外授業は大阪城見学や道頓堀でのクルージング体験。伏見稲荷(京都)やUSJ(大阪)などへの日帰り旅行も実施した。



日本人学生に紹介する時間を作っては」などの貴重な意見に、教員たちも深くうなずいていた。

午後3時からのフェアウェルパーティでは、山本学長が「帰国後も国際的なマインドを持って活躍してほしい」と挨拶。留学生たちは「日本のライフスタイルがとても興味深かった」、「大阪経済大学の人々はみんなフレンドリー」(いずれも、タイ・タイ商工会議所大学)などと語り、充実した内容に大満足の様子だった。

運営に尽力した教職員たちは「今後は長期留学も実現できるよう、環境を整えていきたい」(関立教授)、「私自身のコミュニケーション力が鍛えられた」(大野あずさ准教授)、「日本人学生との交流にもっと力を入れたい」(国際部・石原啓課長)と、それぞれの視点で語っていた。



キャンパスに集う世界の学生たち

●教職員、在学生スタッフが盛り上げた国際交流

7月8日(月)の午後4時から、学生交流七夕パーティを開催。会場となったD館80周年記念ホールに、在学生スタッフが短冊を飾った笹を準備して留学生を迎えた。

緑日の屋台を再現したコーナーや、大



夏期SDフォーラム 「2030 SDGsを理解する」 —広報課×人事課タイアップSD (2019) —

世界のために 共に考え、共に動く

●SDGsを知ろう

持続可能な社会を実現するため、国連サミットで採択された2030年までの国際目標、SDGs(Sustainable Development Goals)。いま、世界各国でSDGs達成に向けた活動が行われ、国内でも多くの自治体、企業、教育機関で取り組みの機運が高まっている。本学も「関西SDGsプラットフォーム」「国連アカデミックインパクト」に加盟し、さまざまな団体とともに目標の達成に向けて歩み出した。

8月30日(金)に開催した職員研修「夏期SDフォーラム」では、89名の教職員が共にSDGsの社会的潮流や他大学の動向、本学での取り組み方針について学び、高等教育機関として何ができるかを考えた。



●「協働」が状況を変える

司会の久保隆氏(2030 SDGs カードゲーム認定ファシリテーター、社労士)のサポートで教職員は「2030 SDGs カードゲーム」を体験した。このゲームは、グループに分かれインフラ整備、学校建設などのプロジェクトを手持ちの「お金」「時間」の札を使って実行するというもの。プロジェクトを達成するごとに、経済、環境、社会という「世界の状況」がどう変わるかがわかる仕組みになっている。プレイヤーはゲームを通じ、自グループのプロジェクト達成に夢中になり過ぎると、経済は成長しても環境や社会の指標が低下していくのだと気づく。そこで過度なプロジェクトの達成を控え、他グループと「お金」「時間」のカードを交換するなど、協働により工夫を行う。その上でゲームをやり直し、

社会や環境の指標が向上になることを確認した。終了後の振り返りの時間では「世界のバランスを意識した開発が大切」「他チームとの協力の意識がめざました」などの感想が上がった。参加者一人一人がSDGsについての意識を深めた意義深い研修だった。

企業との交流機会が多い大塚好晴さん(教育・研究支援・社会連携部)は、「今後、SDGsを切り口にして大学と企業が連携した取り組みを進めたいと考えています」とコメント。また、フォーラムの企画・運営を務めた小林諒太郎さん(総務部)は、「お互いに影響を与え合う創発的な取り組みは大切ですね。引き続き教職員の皆様への質の高いサポートを進めていきたいです」と、それぞれ思いを語った。

2019年度 産業セミナー

学生の就職活動本番に向けて

企業・団体との絆をより強固に

本学は、学生のインターンシップや就職に際してご協力いただいた企業・団体の方々との交流を深め、活発な情報交換を行うため、「産業セミナー」を毎年実施している。今年は8月の東京に続き、11月20日(水)、306社、448名の参加を得て大阪で盛大に開催した。

●学生発表と専門家による講演

プログラムは山本俊一郎学長の挨拶からスタート。参加して下さった企業への感謝の気持ちを表すとともに、「社会を変えていける、『創発』ができる学生を生み出していきたい」と、本学100周年ビジョンをアピールした。

学生による活動報告では、ソト ケンジさん(経営学部2年)がインターンシップ体験を報告。「自分の知らない現場を知りたいと思い挑戦した。満足できる就職に向けて頑張りたい」と語った。また松井

優花さん(経済学部4年)は自らの就職活動について、「大樟塾の仲間とともに、自分ができることに貪欲に取り組んだ」と話した。ZEMI-1グランプリ報告会のコーナーでは、優勝チーム「チャー・J・ケイスケ」による発表「コミュニケーションが不正を防ぐ!?」が行われた。熱のこもった3つの発表に、会場からは大きな拍手が沸き起こった。

プログラム後半では、「『同一労働同一賃金』の法改正への備え」と題して、弁護士の大浦綾子氏が講演を行った。2020年4月(中小企業は翌年)に施行される法改正について概要を説明したのち、法改正に沿って企業が行うべき見直しについて、注意点を詳細に解説。聴講した方々は真剣にメモを取りながら聞き入っていた。

●活発な情報交換会

講演終了後は、会場を4階に移して情



報交換会が開催され、藤本二郎理事長の挨拶のあと、あちこちに歓談の輪ができた。また、セミナー前半で発表した学生や、学歌演奏を行ったマンドリン部、撮影担当の写真部メンバー、司会や受付の学生スタッフが紹介されると、会場から温かいねぎらいの拍手が沸き起こった。

盛会のうちに終了した産業セミナーは、日頃ご協力をいただいている企業・団体の皆様に謝意を表す場であるとともに、本学の学生の質の高さ、意気込みなどをアピールする場となった。進路支援部・岸田祐和部長は「学生に対し、これからも質の高いサービスを提供していく」と力強く語った。



まもなく卒業生総数10万人の 新時代に！ 2019年度大樟会総会、盛大に開催

秋晴れのもと、令和になって初めての大樟会総会が11月3日(日・祝) 11時、D館21教室で開催された。北は北海道、南は沖縄から338人の同窓生らが参加、総会・講演会のあと、学生会館で懇親会が開かれ、大いに盛り上がった。

新しい学長を迎え、100周年に向け発進



会場のD21教室は、ほぼ満席状態。小林眞人副会長(32回)の司会による開会宣言で総会が始まった。物故者への黙祷、グリークラブと会場全員の学歌斉唱のあと、まず田村正晴大樟会会長が式辞を述べた。会長は、「大樟会総会と同日開催されていたホームカミングデーが中止され、今年は大樟会主催のホームカミングデーとなった。これで終わりということではなく、『つながる力No.1』を掲げる大学らしく、もっとウェルカムな卒業生施策を再構築していただくことを期待したい。大樟会は南大阪支部、沖縄支部が設立され、56支部、卒業生総数は9万8,900人となり、来年3月には10万人超に。同窓会員の活躍と強い帰属

意識が大学の持続的発展につながる。大学100周年に向けてその使命を果たしていきたい」と挨拶した。



続いて藤本二郎理事長が祝辞を述べ、「少子高齢化の社会に“残される”大学を、めざさなければならぬ。今年度、若い新しい風となる山本学長を迎えた。学生第一に考え、小異を捨て一丸となって、大学改革を推し進めたい」と表明した。

さらに4月に就任した山本俊一郎学長は「昨年、本学のミッションとして『生き続ける学びが創発する場となり、商都大阪から、社会に貢献する“人財”を輩出する』を打ち出し



た。つまり、100周年を迎える2032年には、本学を知識あふれる場所とし、また、商都大阪の活性化に貢献する学生を育成する。『創発』をキーワードに邁進したい」と抱負を述べた。

続いて永年にわたり母校並びに大樟会の発展に尽力し、このほど退任された秋口政俊前鳥取支部長(39回)に感謝状が贈られた。

最後に本学幹部出席者が紹介され、セレモニーはつつがなく終了。引き続いて、元毎日新聞論説委員 平野幸夫氏による「最新の政経事情」をテーマにした講演会が行われた。

旧交を温め、来年の再会を誓う懇親会開催

会場を学生会館2階に移して、13時から大樟会懇親会が開催された。小林副会長の挨拶でスタート、広島・賀茂泉酒造の菰樽で鏡開きが行われた。

続いて、山本学長が「先の見えない時代、『創発』をキーワードに、次世代の価値を生み出す大学にしたい」と語り、乾杯の発声。会場は華やかな雰囲気に包まれた。

終盤にはビンゴゲーム大会が開かれ、1等(カタログギフト)に山本岩雄さん(33回)、島岡喜洋さん(38回)、木村文世さ

ん(42回)の3名が当選。以下、2等(経大ネクタイ×3本)、3等(経大紅茶セット×3本)、4等(万年筆・ミニノート・紅茶セット×5本)、5等(タオル・ブランケットセット×5本)、6等(経大紅茶×8本)および重田吉庸様(38回)寄贈の特別賞(越乃寒梅×5本)が贈られた。

最後に、下石秀男元応援団長(37回)がエールを切り学歌を全員で斉唱、安田太夫大樟会副会長(46回)の音頭で万歳三唱。閉会の挨拶では、大河内徹心副会長(39回)が「2022年の90周年、2025年の



大阪万博も、共に盛り上げていきたい」と述べた。参加者は、互いに来年の再会を誓い合い、懇親会は閉幕した。

新支部長インタビュー

会員全員で 支部運営を

南大阪支部長 藤田 鉄夫 氏



私たちの南大阪支部は2019年6月2日に設立総会を開催して誕生しました。実は昨年にスタートさせるところまで進んでいたのですが、諸般の事情で実現できませんでした。今年はどうにか設立総会にまで漕ぎ着けることができホッとしております。

当支部のエリアは大阪の南河内地区であり、羽曳野市、藤井寺市、富田林市、河内長野市など広範囲に及んでおり、会員は1,300名を超えています。総会に果たして何人集まるのだろうかと心配でしたが、全員に案内を配り、最終的には40名程度の参加になりました。今後、何をやるのか具体的に決まっていなくてもありますが、支部内で協議をして色々知恵を絞って総会以外にも会員が興味を持てるようなイベントを企画するなど、支部活動を盛り上げていきたいと思っています。同窓生の皆様のご指導、ご協力をいただければと思います。

各支部では毎回案内状を全員に送っている支部が多いようですが、当会のような大所帯では、毎回全員に案内状を出していたら本部からの補助金がほとんどなくなってしまいます(笑)。今後は他支部の手法も参考にしながら、工夫をしていきたいと思っています。

大学に対する希望としては、全国的に大学のネームバリューをもっと上げるような施策を打ち出してもらいたいですね。一朝一夕にできることはありませんが、我々、同窓生の共通した希望だと思います。

大学という繋がり で人生のプラスに

沖縄支部長 西里 喜明 氏



従来は南九州支部として鹿児島県と一緒に活動をしていました。しかし、支部総会で沖縄から鹿児島まで行く人数は非常に少ないのです。たまたま縁のあった小谷副学長のご提案で「沖縄支部を設立したらどうだろう」という話があり、大樟会本部と南九州支部のご理解、ご支援もあって、2019年6月23日に支部発足というところまで漕ぎ着けました。名簿上、会員は30名余りでしたが、都合がつかないという方も多く、実際に設立総会に出席できたのは7名でした。田村会長からは「小さく産んで大きく育てろ」という温かいお言葉をいただき、取りあえずスタートすることができました。ただ、ありがたいことに沖縄の場合、若い30歳代の方々に連絡がついたということもあって、次回以降はスケジュールの調整をしながら、何とか参加人数を増やしていきたいと思っています。まず同窓生に同窓会の認知度を上げることが大切だと思います。

同窓会という古いイメージだけが先走りますが、若い人たちにも楽しめるという同窓会ができればいいのかなということ、これまで縁もゆかりもなかった同窓生が大学という一つの繋がりですべての人生にプラスになるような情報が共有でき、年に1回か2回くらい行ってみたくて思わせることができればいいかなと思っています。具体的にどうしたらいいのかということはこれから考えなくてはなりません。

DAIKEIDAI INFORMATION

卒業式・学位授与式のご案内

2019年度大阪経済大学卒業式・学位授与式を下記のとおり挙行政いたします。



昨年の卒業式・学位授与式の様子

午前の部

対象学部：経済学部、人間科学部、
大学院経済学研究科、
大学院人間科学研究科

場 所：70周年記念館 フレアホール
日 時：2020年3月14日(土) 10:00～
(卒業生入場は9:30から)

午後の部

対象学部：経営学部、情報社会学部、
大学院経営学研究科、
大学院経営情報研究科

場 所：70周年記念館 フレアホール
日 時：2020年3月14日(土) 13:00～
(卒業生入場は12:30から)

- 学生・保護者用駐車場はありませんので、車でのご来場はご遠慮ください。
- 式典には、多数の保護者の方が参列される見込みです。式典会場の保護者席には限りがあり、満席の場合は、同館3階の教室において、同時放映をご覧いただくことになりますこと、予めご了承ください。

お問い合わせ先

大阪経済大学 総務部総務課
TEL:06-6328-2431 (代表)

2020年度 教育懇談会のお知らせ

下記の日程を予定しております。

大阪 6/20(土) 6/22(月)～26(金)

▶大阪経済大学

岡山 7/4(土) ▶岡山プラザホテル

高松 7/5(日) ▶リーガホテルゼスト高松

懇談WEEK

※詳細、お申込方法については、2020年5月頃にご案内します。

教育振興募金のお願ひ

本学では、教育振興募金事業において「①海外留学支援などのグローバル人材の育成、課外活動支援の充実」「②奨学金制度の充実」「③施設の整備・充実」に取り組むため、皆様からのご支援をお願いしております。

2019年度からは教育研究の振興に取り組むべく、「④教育研究の振興」を新たな目的・使途として設けました。2022年の創立90周年を控え、本学では教職員一丸となり、より一層の教育研究・経営改革等に努めてまいりますので、今後ともご理解とご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

教育振興募金へのお申込み方法

①銀行振込の場合

例年6月にお送りしております払込取扱票をご利用ください。(指定銀行の場合、振込手数料無料)
※お問い合わせ先までご連絡いただきましたら払込取扱票をお送りします。

②インターネット(クレジットカード払い可)の場合

<https://www.osaka-ue.ac.jp/information/contribution/application.html>
からお手続きください。



③本学窓口受付(現金)の場合

J館2階経理課にてお手続きください。

④古本募金(本学はきしやぼんの協働パートナーです)の場合

※古本募金とは、書籍やCD・DVDなど使い終わったものをリサイクル換金してご寄付いただく方法です。

●インターネット

<http://www.kishapon.com/osaka-ue/>
からお手続きください。



●電話

フリーダイヤル0120-29-7000へ「大阪経済大学に寄付したいのですが」とお伝えください。

お問い合わせ先

大阪経済大学教育振興募金事務局(総務課)
06-6328-2431(代)